



齋藤 眞
(名古屋大学医学部所蔵)

(これが人間の頭の骨か……。) 医学に興味があった幼い眞の目は、初めて見る頭蓋骨にくぎづけになりました。ある日、戦争に行った医師である父から、銃で頭を打たれて死んだ兵士の頭骸骨が送られてきたのです。戦争から帰った父は眞に、

「頭のけがの治療は遅れている。これからは頭の研究が大切だよ。」

と話しました。それから眞は、人の体の中でも特に頭への関心を深め、頭蓋骨をかたわらに置きながら医師になるため勉強にはげみました。第二高等学校(現在の東北大学)、東京帝国大学医学科(現在の東京大学医学部)を卒業して、念願の医師になりました。

医師になった眞は大学の外科に勤め、治療と研究の道を歩み始めました。その一年三か月後には愛知県立医学専門学校(現在の名古屋大学医学部)の講師となりました。この時の眞はわずか二十七歳で、当時には考えられない若さでの就任でした。しかし、若くして教壇に立った眞への同僚の態度は冷たいものでした。眞とすれちがってもあいさつもせず、かげでは悪口を言うという始末でした。その上、生徒は授業に真剣に参加しないばかりか、やじを飛ばしました。

「医者になったばかりのお前に何が分かる。」

「おれたちよりも年下のくせに、えらそうに授業するんじゃない。」

眞は悩みました。うまくいかないのはなぜなのか、どうすればよいのか考えました。けれども、答えは見つかりません。

しばらくすると眞は、仕事の合間も惜しんで研究に専念し始めました。一人研究室に閉じこもり、読書や研究に没頭しました。東京で重要な手術があるときには仕事が終わると夜行列車で上京して学び、手術が終わるとすぐ名古屋に戻って病院の仕事と授業、研究を行うといった生活を続けました。このような眞の姿は、同僚や生徒たちの気持ちを少しずつ変えていきました。しだいに同僚や生徒から受け入れられるようになった眞は、二年後には教授に昇格し、外科部長にも任命されました。

医師として高い地位についた眞でしたが、その胸の中は満たされてはいませんでした。幼いころから興味をもっていた脳神経外科を学ぶことができていなかったのです。当時の日本では、頭を手術するということは考えられず、頭に大きなけがをすると、そのまま命を失うことがほとんどでした。眞は脳神経外科を日本に広めたくさんの命を救いたいという思いをもっていたのです。そのために、当時の医学の最先端であるヨーロッパへ留学することを決意しました。このことを学校長に相談すると、

「きみは外科部長になってまだ間もない。今留学を許すことはできない。
留学の費用も、一切出すことはできない。」

と反対されました。それでも眞はあきらめませんでした。少しでも早く外国の進んだ医学を学ぶことこそ、自分が一番しなければならぬことだと強く信じていたのです。眞は苦勞の末に築き上げた教授と外科部長の地位を捨て、自費でヨーロッパへ留学することを決めました。横浜から旅立つ眞への見送りは少なくさみしいものでしたが、眞の顔には少しのくもりもありませんでした。その眼は真っ直ぐに、はるかな水平線の先を見つめていました。

三十歳でヨーロッパへ渡った眞はウィーン大学、ベルリン大学、パリ大



脳神経外科：
脳や頭の病気やけがに対して、手術などで治療を行う医学の分野のこと。

就任：
役に就くこと。

専念：
ある一つのことだけを熱心にやること。

没頭：
一ことに熱中すること。

自費：
個人で支払う費用。

学というヨーロッパを代表する学校で脳神経外科を学びました。ひたむきに勉強した眞は、ヨーロッパの進んだ技術をまたたく間に吸収しました。その取組が認められて、愛知医科大学（現在の名古屋大学医学部）から教授に任命され、さらに二年間の留学の延長を許されました。

四年間に渡る留学の中で最先端の技術と知識を身につけて帰国した眞は、日本の脳神経外科の技術を、なんとしてもヨーロッパ並みに引き上げなければならぬという強い思いをもって仕事に取り組みました。朝早くから夜遅くまでたくさんの仕事をこなしながら、脳腫瘍の診断と治療法や脳のレントゲン撮影など次々に自分の研究の成果を世界へ発表し、脳神経外科という新しい分野の開拓を進めていきました。

昭和十六（一九四一）年、太平洋戦争が始まりました。眞がいた名古屋も度重なる爆撃により多くの死傷者がでました。眞は空襲の中を駆け回りながら、たくさんの命を救いました。病院や自宅が燃えたり、疲労で体をこわしたりしながらも、休むことなく負傷者の治療に全力を傾けました。

昭和二十（一九四五）年には終戦を迎えましたが、眞の勤める名古屋大学病院も大きな被害を受けました。それまでに整備してきた施設や設備、研究を進めてきた資料などすべてが灰となってしまいました。（これではもう患者を救えない……。研究もできない……。）

みんながぼう然としていたその時、眞はつぶやきました。

「なに、初めからやり直せばよい。」

一面の焼け野原となった病院のあとを前につぶやいたその一言には、強い決意がこめられていました。

翌年、眞は名古屋大学病院長となり、復興のために懸命に働きました。患者の治療、学生や後輩医師の指導、自分の研究に加え、病院の設計図を描き、施



被災した名古屋大学医学部
（名古屋大学附属図書館医学部分館所蔵）

設と設備の検討まで行いました。さらに、戦争から立ち直るためには、一刻も早く全国の病院を復興しなければならないと考え、日本全国を飛び回って支援金を集めました。この眞の活動により、全国にたくさん病院が建てられました。昭和二十三（一九四八）年には、念願の日本脳神経外科研究会（現在の脳神経外科学会）を作り、その会長を務めました。この研究会の発足により、日本の脳神経外科は大きな進歩を見せ、多くの人々の命が救われるようになりました。幼いころから描いていた眞の思いが、ようやく実現したのです。



学会で発表する眞（名古屋大学医学部所蔵）

たくさんさんの苦難を乗り越え、医師としての道を迷わずに生きぬいた眞の手帳には、次の短歌が詠まれていました。

「雨よ降れ 風も吹け吹け 日も照らせ わが行く道は 白き一文字」

齋藤眞

齋藤眞は、明治二十二（一八八九）年、敷玉村青生（現在の美里町青生）に生まれた。脳神経外科を海外で学び、脳腫瘍の診断と治療法、脳のレントゲン撮影、輸血法など、たくさんさんの研究の成果を世界に発表した。また太平洋戦争からの復興へ向けて、名古屋大学病院長に就任し、病院の整備、全国各地の病院設立、脳神経外科研究会の発足などに力をつくした。

脳腫瘍：
脳や頭蓋骨の中に
できるかたまり。

復興：
こわれたり、おと
ろえたりしたもの
がもとのように盛
んになること。

発足：
団体などが作られ、
活動し始めること。